

生活の実感の違いから生まれる「摩擦」のおもしろさ

武田篤

APAF では、アジア各国の演出家・役者の共同制作作品に触れる中で、何をもって「アジアのパフォーミング・アーツである」と言えるのか？ という問いと向き合うこととなった。

同じ人間として以上に「アジアに住んでいるアジア人同士」だからこそ共感できる作品とは、一体どんなものだろうか。なかにはフィジカルな表現を共通言語として制作された作品もいくつか見受けられた。しかし言葉を介さないのなら、アジア以外の他国とのコラボレーションでもよいのでは？ という疑問が残る。

その点、国際共同クリエーション公演である中野成樹さんの作品『Waiting for Something (サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』より)』は、アジアの異国間の生活感覚の違い、言葉の壁に真正面から向き合っていたと思う。

幸いにして、ゲネプロと本番を拝見する前に、稽古場を見学する機会を得た。印象的だったのは、劇中で日本人俳優の村上聡一さん演じる男性が過去に一度結婚していたことを韓国人女優チェ・ナラさん演じる妻に告白し、それを彼女が許すというシーンの稽古だ。チェさんが「私の感覚か、韓国の感覚かはわからないが、この男性はものすごく失礼で許せない。文化の情緒の違いなのかもしれないが、納得できない」と稽古を止めたのだ。

これを受けて演出家と役者全員との話し合いが始まり、「文化の違いというより性別や、**個々人の結婚観の違い**なのかもしれない」といった意見も聞かれた。

最終的には「登場人物全員が演出家**と同じ価値観や思考回路を持っている必要はない**」という結論に達し、どちらか一方の価値観に合わせるのではなく、あらずじは当初のままだが台詞は大幅に変えて上演された。

このように（各国の伝統的なパフォーミング・アーツ同士のような分かりやすい文化の差異ではなく）それぞれ異なる環境で暮らしていることに由来する、現代人が持っている生活の実感の差異を衝突させていることがとても興味深かった。

そうした意味で、広田淳一さんの“分かり合った風”で進まないように、とことん話し合うという言葉には共感した。役者が演出家の世界観を理解して表現しようとするだけでなく、そこに対話があること、互いの感覚や意見を尊重しながらつくっていくことが、国籍に限らず全く異なる背景を持つ人々と作品をつくる上で必要なことなのではないだろうか。

個人的には 2013 年 2 月に初めて台湾を訪れ、ようやく APAF での体験が自分の中で完結したと感じた。空気や自然光の色の違い、食べ物の味、色鮮やかな看板、街中を大量に走るバイクなど、何もかもが新鮮に映り、こんなにも違う世界があるのだということを発見した。と同時に、やはりどこか「仲間だ」という懐かしさや親しみを覚えた。

成田空港に着いたときは「帰ってきた」というより「日本という国に来た」と感じた。台湾を発見することで、日本を再発見したと言えるかもしれない。

今回、こうした場に参加できたことはとてもラッキーだったと思う。欲を言えば、ロビートークは一問一答だったので、もう少し対話や交流ができる時間があるとよかった。また稽古場をたくさん見たかった。そこにはもっと色々な摩擦が起きていただろうと想像するからだ。

自分は大学で演出コースに在籍し現代劇を志しているが、今後は伝統楽器とのコラボレーションに挑戦してみたいと考えている。楽器は伝統文化も吸収しつつ、かつ異文化へもシームレスに介入しやすい。自分自身、高校時代 3 年間和太鼓や篠笛を演奏していた経験がある。

まずは現代劇（せりふ劇）と生演奏との有機的な関係性を探るところから始めたいと考えているが、いずれはアジア各国の楽器と日本の楽器をコラボレーションさせた舞台をつくってみたい。そのときは APAF で発見したような「摩擦」をも感じられる作品に昇華できたら、と考えている。